小玉教育長記者会見録

日時/令和３年５月 31 日（月）
15：00～15：30
場所/別館庁舎７階教育委員会室

【冒頭挨拶】
退任に当たっての挨拶

【記者からの質問】
1　今後、副知事として学校関連のコロナ対策に今後どのように取り組んでいくか（北海道新聞）
2　一斉休校を求めることはないか（北海道新聞）
3　山口県が生徒や教職員を対象にＰＣＲ検査を実施するが、北海道でＰＣＲ検査やワクチン接種について学校を優先する考えはあるか（北海道新聞）
4　「もう一つのクライマクス事業」への思いについて（読売新聞）
5　現状での部活動の在り方について（読売新聞）
6　もう少し教育行政に携わりたかったという思いはあるか（朝日新聞）
7　次期教育長に特に引き継ぎたい政策は（朝日新聞）

【冒頭挨拶】

皆さん大変お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

これで在任中９回目の記者会見ということになります。

できるだけ道議会での真ん中にならない限り、毎月開催したいと思ってきましたので、本当に皆さんにご参加いただきまして、ありがとうございます。

前任の佐藤教育長が急逝され、予期せぬ大役を仰せつかり、１年と１か月が経過いたしました。

この間、コロナ禍での子どもたちの命と学びを守るために全力を尽くしてまいりましたが、今なお厳しい状況が続いております。

就任当時、学校は一斉休業期間中でありましたので、社会的な距離を保ちながら、学びを保障するため、リモート学習の一刻も早い導入が求められていましたが、そのための装備と人材を即座に揃えることは困難でした。

このため、身の回りの教育資源と行政資源、さらには民間企業の応援など、あらゆる手立てを投入しながら、できることから始められるよう「リモート学習応急対応マニュアル」を策定し、各学校における最大限の取り組みを促してまいりました。

学校再開後には、オンライン授業のノウハウ向上と、家庭、地域での接続環境等を確保するため、官民協働の様々なプロジェクトを展開してまいりました。

こうした取組はGIGAスクール構想の前倒しと、遠隔授業配信センターの開設といったSociety5.0時代における新たな学びの潮流に勢いをつけたものと考えています。

また、子どもたち、教職員、保護者、地域の皆さんに、長引くコロナ禍での悩みや不安を１人で抱え込まず、温かい心で繋がっていただくよう「メッセージ」をお届けするとともに、教員の確保と地域創生を目指す「草の根教育実習システム」の構築など、学校と地域との緊密な連携、すなわち地学協働の力で、未知の教育課題に対処する仕組みづくりを進めました。

このほか、印象に残った仕事の一つに、部活動の集大成の場を失った最終学年の生徒たちに、晴れ舞台を提供するという「もうひとつのクライマクス」というプロジェクトがあります。

生徒たちを元気づけるのが目的でございましたが、私をはじめ道教委という組織にとりましても、逆境にくじけない青春アスリートの姿に、教育行政に望む情熱を奮い立たせていただきました。

私は明日から違う立場で行政に携わることとなりますが、引き続き道教委そして道職員が真に一丸となって、子どもたちが生涯にわたり輝き続ける学びの充実に向け果敢にチャレンジしてまいります。

結びに報道機関の皆様には、コロナ禍で様々な制約があったにもかかわらず、取材をいただき、子どもたちの様子や学校の取り組みを熱心にお伝えいただきました。

おかげさまで子どもたちと学校が誇りと自信、希望を抱くことができ、心から感謝申し上げます。

今後とも、本道教育の充実発展に向けて、ご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げ、挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

【記者からの質問】

（北海道新聞）

副知事になられるということで今後のことを何点かお伺いしたいのですが、道内の学校関係でコロナにおける休校などが毎日のように出ているわけですが、副知事として学校関連のコロナ対策、今お話しいただける範囲でかまわないですが、どのように取り組んでいかれるお考えでしょうか。

（教育長）

やはり今年の春、連休あたりから非常に学校での感染が確認されて、増えております。

基本的な対処方針をまず申し上げますと、国の緊急事態の対処方針の中においては、感染防止対策の徹底を要請することに加えまして、感染リスクの高い活動等を制限する、遠隔授業も活用する、そういったような内容が書かれております。

加えまして、文部科学省のマニュアルの中では小中学校については地域一斉の臨時休業は避けるべきとありまして、これは医療従事者等の負担の観点を考慮してということもあります。

そういうことから、一方で高校生の活動範囲は非常に広いですので、時差登校とか分散登校、それからオンライン学習を組み合わせてやってほしいというような大原則になっております。

他県におきましても分散登校とかはやっておりますけれども、地域一斉休業という措置はとられていません。

ただ、昨今やはり影響が広がっているということで、いろんな角度から見る必要があるかなと思います。

結果的に確かに臨時休業は増えておりますが、たとえば小学校でいうと道内およそ1,000校あります。その1,000校の中で先週時点では20校ぐらいで学級閉鎖というのがありました。

そういうことから、90パーセント台後半、97、98％は臨時休業等の措置を講じずに、安全と学びを確保して頑張っているということです。

そして今、休業が小学校で20校ぐらいあるのですが、その中でも結果的に1人で収まっていたりする。35人の学級全体でお休みになっているケースもあるのですが、結果的には１人の陽性確認で済んでいるという状態のものがほとんどです。

ですから、今のやり方としまして、保護者が濃厚接触になったらお子様の安全を考えて登校させない。そして、その子が陽性確認されれば、そのクラス全体を一応用心のためにお休みさせるという対策を迅速にとっている例が多いです。

したがいまして、影響を受ける範囲は非常に広がってはいるのですが、結果的には、個発といいますか１人の感染者で抑えて、クラスターへの広がりは防いでいるということからしまして、やはり一校一校が基本的な感染対策をきちんと行う。社会全体の影響にもなりますし、医療、介護にお就きの親御さんも何十万人といらっしゃいますので、そういったことを考えると今の一つ一つの学校で、躊躇なく安全に沿った対策を講じていくという方法が最適かと思っております。

（北海道新聞）

確認ですけれども、この後、爆発的な感染が起きたらまた別なのかもしれないですけれど、現在の道内の感染状況を考えますと、一斉休校を求めることはないということですか。

（教育長）

地域一斉休業という考えは今はないです。

学校によってはですね、たくさん出ますと学校閉鎖というのはありえます。

ただ、その地域全体を一斉休業という考え方は、社会全体が止まってしまうような状況にならない限り、考えてはいないです。

（北海道新聞）

山口県が県立高校の生徒と教職員４万人くらいを対象にしたＰＣＲ検査を実施するという話が出ています。

今のお話ですと、道内の方が緊急事態宣言も出て逼迫している状況なのかなと思いますが、ＰＣＲ検査やワクチン接種について学校を優先してやるとか、そういった考えはお持ちでしょうか。

（教育長）

決して先ほど言った数字を過小評価しているわけではないです。できることなら万全の対策を講じていく必要があると思います。

検査機関の負担とかいろいろコストの問題もあります。今できることから、やっていただいているということでは、毎日体温と体調のチェックを入力していただいて、それを把握し、不安のある生徒さん、教職員含めて、適切な診断や検査を受けるよう確認しているという対策を講じております。

今後、国の方も抗原検査を高校生も対象にするということで、数的にも少し絞り込まれているようには見えますが、そういった対策も取り入れながら、情勢も変わってきま

すので、それに応じて実効性のある対策を講じていきたいと考えています。

（読売新聞）
先ほど「もう一つのクライマクス事業」が一つの大きな事業だったというお話がありましたが、その事業についての思いをもう少し詳しく教えていただきたいのと、今の感染状況でも一部部活動が続いている状況にあると思うのですが、部活動が感染の原因となるという指摘も一部ではあると思うのですけれども、部活動の在り方について小玉教育長のお考えをお聞かせください。

（教育長）
去年、インターハイ、甲子園とか、全国的なメジャーな大会が早くに中止を決定し、それまで夢を追いかけてきた子どもたちが、喪失感を抱いたということで、いろいろな人から何とか元気づける方法はないだろうか、というお声をいただきました。
確かに、従来自分たちが目指してきた夢は少し変わるのかもしれませんが、せっかく努力してきたこと、これはスポーツだけ、部活動だけに限りませんが、そういった努力を積み上げてきたことが一瞬で無駄になってしまうんだということを感じてほしくなかったということです。
これからも目標は社会に出れば変わりますし、挫折もたくさんありますが、日々やってきたことっていうのは必ず何らかの形で報われることがたくさんありますので、これからも夢を描くことをやめないでいただきたいし、それに向かって努力していただくことも止めないでほしいと思います。
そして、それをみんなが応援してるんだよっていうことを知っていただくためにやりましたし、そういう意味でいろいろな方々を途中で巻き込んでいくことができたということで、意義があったなと思っております。
それから今年はやはり、部活動という活動の性格と変異株が感染しやすいということもありまして、部活動に起因した感染が発生しております。
そして６月から全道大会が本格的に始まります。30 競技ぐらいございますので、ここは何としても食い止めなければいけない。
特に広域の移動が伴いますので、それにより人流が活発化することによって感染が拡大することは、何としてでも防ぎたいと考えております。
それには生徒ご自身の健康管理というのはもちろんですが、もう少し第三者の目も入れて、第三者の目というのは学校の中に校長会をはじめ保健委員会もございますので、そこでしっかりと第三者的に多重チェックをしてもらいたい。
それは大会に出場する５日ないし７日前に、体温とか体調を２週間分の記録をチェックしていただいて、不安のある生徒にはＰＣＲ検査なども受けてもらう。
それで健康であることを確認して、指導してもらうというような体制を整えました。
それからご家族に対しても、せっかくの子どもの晴れ舞台のチャンスを失うことがな

いよう、ご家族ぐるみで健康管理と行動変容をお願いしております。
それから学校の中で部活動がたくさんございまして、その部活動には顧問がいらっしゃいますので、顧問同士がきちんと指導助言し合う体制を整えるべきだと思いまして、部活動顧問会議を校長さんが開いてください、そこで情報共有し、互いに指導、助言する体制を築いてくださいということをお願いしています。
それから地域ですとか、ＰＴＡとか、クラブ活動を支えているのは後援会とかございますので、そういった方々にも一緒になって、安全な部活動に協力してほしい、あるいはオンライン観戦になるけれども、精一杯応援してくれと、そういったようなお願いを呼びかけております。
また、田中賢介さんに登場していただいて、「Keep on Shining」というコピーを載せた寄せ書きみたいなものを学校に貼っていただくような呼びかけもしております。
こういうことで個の守りと、チームの守りと地域の守りというものを固めてですね、何とかこの部活動で感染が広がらないように、そしてその後全国を目指すということもありますので、これまでの努力が報われるようなステージを大切にしていきたいと思っています。

（朝日新聞）
まず一つは、佐藤教育長が亡くなられてほぼ一年という短い任期だったと思うのですが、ご自身としてはもう少し長く教育行政に携わっていたかったという気持ちはおありでしょうか。

（教育長）
正直言って、もう少しこうしたかったということはあります。
一つが、やはり現場をもっと見に行きたかったということです。
やはりこういう状態ですので、学校に行って子どもたちと触れ合うという、視察なり交流が十分できなかったと思っております。
また、私はやはりこれからの教育行政を背負っていただくのは道教委の若手職員の力だと思っていますので、できるだけ地域の教育局などの若い人たちと意見交換をしてみたかったと思っております。
ただ、これからあちらの立場にいっても、私学や幼稚園、専修学校とか大学とかそういったいろいろな学びの政策には関われると思っておりますので、また違ったアングルから子どもと学びを真ん中に据えた政策に汗をかいていきたいと思っています。

（朝日新聞）
もう一つ、今のことに関連してなんですが、次期の教育長に何か一つ「ここは特に引き継ぎたい」というような政策というのはありますでしょうか。

（教育長）

新型コロナウイルス感染症が続く中で、安全と学びをしっかり守る対策を講じていただきたいのは、まず第一だと思います。

続きまして、やはりＩＣＴ教育については大きな転換期にあると思います。この流れにしっかり北海道としても乗って、北海道の教育の発展に繋げていただきたいというのが二つ目です。

三つ目は学校の外といいますか、地域との繋がりが学校の魅力、学びの魅力を高めるものだと思っていましたので、地域と学校の協働、「地学協働」ということをよく言っております。教育庁の組織もそういう組織にいたしましたので、なるべく学校だけでなく、外と繋がってほしいと思っています。

特に去年は、静内農業の馬を紹介したり、ブランド開発を行っている学校が各地にありますので、そういった学校のユニークな取組、地域創生に繋がるユニークな取組を紹介してきました。

そういったものを今後も進めるためにも、地学協働体制の推進というものも期待しております。

また、最後に一言だけ。

オンライン学習をどんどん進めていただきたい、できるところから始めていただきたいと思っています。

完璧なオンライン学習というものは、なかなか習熟するまでは難しいかと思いますが、簡単に出来ることもございますので、出来ることから始めていただきたいと思っています。

私も今日、この会見をスマートフォンで教育局に配信しております。

ですから、こんなことは簡単にできるということを現場で理解していただいて、これだったらできるよね、始めてみようと、やれるとこからやってみようという雰囲気をオール北海道で作っていただければなと思いますので、もし良い取組がありましたらぜひ取り上げて広げていただければなと思います。ありがとうございました。

この文章については、読みやすいよう、重複した言葉づかい、明らかな言い直しなどを整理して作成しています。

（文責　教育政策課）